

第一部 八ヶ岳の地形と地質

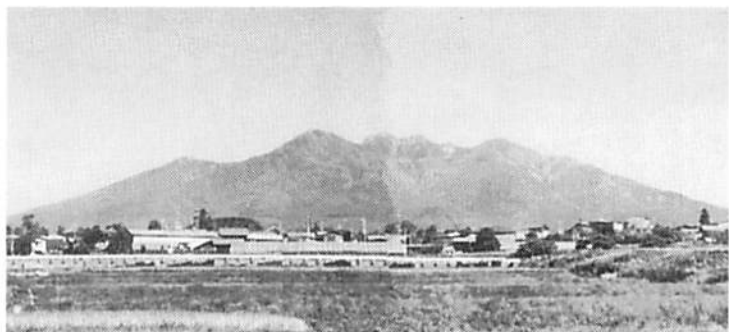
# 1 八ヶ岳へのいざない —— 山麓からの眺め ——

八ヶ岳の自然とその生い立ちを訪ねるのに先立って、まずは山麓をドライブしながら、あるいは鉄道の旅をしながら、八ヶ岳のアウトラインをたどってみることにしましょう。

## (1) 中央自動車道からの八ヶ岳

### 南麓から見た八ヶ岳

東京方面から中央自動車道（以下中央道と略）を通過して信州に入るドライブをしながら、八ヶ岳を眺めてみましょう。甲府盆地まで来ると、信州までもう一息です。甲府盆地の境川パーキングエリアからは、天気が良ければ北西方向に遠くうっすらと八ヶ岳の姿を望むことができます。盆地の縁の双葉サーピスエリアを過ぎると道は長い上り坂となって、どんどん標高を増してゆきます。やがて、右手に長いすそ野を持った山並みが見えてきます。八ヶ岳とよく勘違いされるのですが、これは茅ヶ岳（一、七〇四）で、俗に「ニセ八ツ」といわれたりしています。ところが、葎崎インターチェンジ付近まで来ると、目の前に大きな山が現れてきます。これが本物の八ヶ岳で、これから徐々にその大きさを増していきます。八ヶ岳がなだらかなすそ野を引く火山であるのに対して、左手にそびえる甲斐駒ヶ岳（二、九六五）や鳳おうさきん風三山など南アルプスの山々は険しい岩山で、好対照をなしています。



長坂付近から見た八ヶ岳

葦崎インターチェンジを過ぎるころから左手に谷を隔てて丘陵が続いているのが見られます。須玉すたまインターチェンジを過ぎると高速道路はその丘陵に上がっていきます。丘陵とはいえ、その上は小山と谷とが不規則に入り組んでいて、かなり起伏があります。これは八ヶ岳の崩壊によって生じた「葦崎岩屑流」の堆積した所なのです。表面の小山は「流れ山地形」と呼ばれていますが、高速道路はその間を縫って走っているのです。

この辺りは、八ヶ岳を南麓側から眺めるのに最も適した場所で、特に長坂インターチェンジ付近からは、ごつごつとした権現岳を中心に西側に円錐形のなだらかな編笠山と西岳、東側には三ツ頭が並んでいるのが見えます。この先の八ヶ岳パークングエリアで車を止めて一休みしてみましょう。ここからの眺めは残念ながら手前の小さい丘のおかげで、八ヶ岳の五合目より上しか見え、やや迫力が欠けます。それでも先程あげた八ヶ岳南端部の山々を間近に眺めることができます。

## 西麓から見た八ヶ岳

小淵沢こぶらさわインターチェンジを過ぎると高速道路は八ヶ岳南西麓の高原地帯に入り、道路もほとんど平坦となります。この辺りは傾斜の緩やかな斜面が広がっていて、深い谷を刻む川はほとんどありません。唯一の大きな川は、八ヶ岳の主峰赤岳を源流とする立場川たちばがわで、延長五四〇メートルの橋がかかっています。その橋を渡ってまもなく、「高速道路最高地点 一、〇一五メートル」の案内板が目飛び込んできます。知らず知らずのうちにこんなにも高い所に上っていたのかと、改めて驚かされます。

この辺りからは八ヶ岳南部の山々が広いです。野の向こうにそびえているのがよく見え、右からなだらかな編笠山、険しい岩山の権現岳、赤岳、阿弥陀岳、横岳などの峰が望めます。しかし車を止めて眺めるわけにもいかず、やがて長い下り坂が続き、諏訪盆地へと向かいます。

## 諏訪湖サーブスエリアから見た八ヶ岳

富士見高原から長い下り坂にかかると、道は切り通しとなって視界がきかなくなります。諏訪インターチェンジの手前で諏訪盆地の平地に出ます。やがてすぐに上り坂となって盆地の西側の山腹を走るようになり、視界も開けてきます。諏訪湖が見え始める辺りに、諏訪湖サーブスエリアがあります。ここでまた一休みすることにしましょう。

中央道を名古屋方面から来たなら、岡谷ジャンクションを過ぎるとすぐに諏訪湖が見え、やがて諏訪湖サーブスエリアに到着します。



諏訪湖サービスエリアから見た八ヶ岳

ここは諏訪地方がほとんど見渡せる、実に眺めのすばらしい場所です。眼下には左手に足元近くまで諏訪湖が広がり、右手に平らな田園地帯が広がっています。その向こうの、正面に見える盆地の東側の山は非常になだらかなスカイラインを見せています。これは霧ヶ峰の山々です。視線をゆっくり左に転じてゆくと諏訪湖の北岸に下諏訪・岡谷の町並みが広がっています。その背後の、山並みが低くなっている辺りが塩尻峠です。霧ヶ峰から塩尻峠、そして今立っている辺りと、諏訪盆地をぐるりと取り囲んでいる山々は、八ヶ岳よりも一時代前の火山活動による「塩嶺累層えんれいりゆうそう」によってできています。そこにはもう火山らしい地形はほとんど見られません。その塩嶺累層が分布している地域の中を横切って、日本列島を横断する大断層「糸魚川—静岡構造線（糸静線）」が通っています。諏訪の辺りで糸静線は大きく二またに分かれ、その間が落ち込んで凹地ができました。それが諏訪盆地なのです。

霧ヶ峰の平らな山並みの背後に、均整のとれた独立した山が見えます。八ヶ岳連峰最北端の蓼科山で、その姿から別名「諏訪富士」とも呼ばれています。そこから右側にたどってゆくと、横岳、縞枯山、茶白山となだらかな北八ヶ岳の山々が続きます。八ヶ岳の稜線の中で一番低くなっている所が麦草峠むぎくさとうげで、その先に丸山、中山となだらかな山が続き、一段と高さを増して三角

形に尖っているのが天狗岳です。その右には夏沢峠を隔てて高く険しい峰々が連なっています。硫黄岳、横岳、八ヶ岳の主峰赤岳、阿弥陀岳、権現岳と続く南八ヶ岳の山々です。そして一番端に頭の丸い編笠山があり、そこから緩やかなすそ野を引いて富士見高原へと続いているのが見えます。一般的には八ヶ岳は夏沢峠を境として南北に分けられていますが、北八ヶ岳の丸くならかな山並みと、南八ヶ岳の険しい岩山が好対照をなしているのがよくわかります。中央道沿線では八ヶ岳全体をゆつくりと眺められるのはここだけです。高速道路をはずれ、諏訪市から富士見町にかけての盆地の西側の山に少し登れば、このような八ヶ岳の姿はどこからでも眺めることができます。

塩嶺の古い火山の活動、大断層の活動と諏訪盆地の形成、そして八ヶ岳の火山活動。目の前に広がる景色の中にも大地のダイナミックな活動の歴史が秘められています。

## (2) JR小海線に沿って

### 清里・野辺山高原

山梨県の小淵沢駅から長野県の小諸市を結んで八ヶ岳の南麓から東麓を走る小海線は、一九三五年に開通し、全国のJR駅標高ベスト10のうち9位までを独占しています。そのため、別名「八ヶ岳高原線」とも呼ばれています。ちなみに第10位は富士見駅で、これも八ヶ岳山麓にあります。「宇宙に一番近いロマンチックトレイン」こんなキャッチフレーズをつけられた高原列車の二時間四〇分あまり(七八・九)の旅を楽しむことにしましょう。



野辺山原から見た八ヶ岳

中央線の小淵沢駅からは、南に南アルプスの甲斐駒ヶ岳を、そして北には八ヶ岳を望むことができます。ここから見る八ヶ岳は、富士山の上半分が壊されてしまったような姿をしています。真ん中のごつごつした五つのピークを持つのが権現岳で、その東西の円錐形の山が編笠山と三ツ頭、編笠山のさらに左のやや低い山が西岳です。この小淵沢駅から小海線に乗ってみましょう。小海線は八ヶ岳の南のすそ野を走り、東麓の野辺山高原方面へと向かいます。山すそを切り開いた中を走ることが多いものの、車窓からは徐々に変わっていく八ヶ岳の雄大な眺めを楽しむことができます。走っていくにつれて、より高く荒々しい姿の赤岳が見えてきます。甲斐大泉付近ではほんのわずかの間、阿弥陀岳も姿を見せます。清里付近になると横岳も見えるようになり、南八ヶ岳の山々が少しづつ姿を現してきます。そして目の前がバツと開けて、見通しのきく平坦地に出ます。そこがJRの最高標高地点（一、三七四九<sup>五</sup>）で、野辺山高原に出たのです。山梨県に別れを告げて、ここからは長野県に入ります。野辺山駅で降りて、八ヶ岳とその周辺を眺めてみましょう。ここからは南から北へと長く連なる八ヶ岳の南半分、南八ヶ岳を眺めることができます。権現岳から赤岳の頂上へと向かう稜線上には、二つの槍状の岩峰、大天狗と小天狗が突きだしてい

るのがはつきりと見えます。主峰赤岳の右には長い稜線を持つ横岳、山頂がゆるやかな弧を描いてほぼ平らに見える硫黄岳と続き、わずかに天狗岳が顔をのぞかせています。それより北の山々、北八ヶ岳は、山の列が北西方向へと向きを変えるために見ることができません。

南八ヶ岳の稜線から足下の野辺山高原へと視線を移してみると、険しい岩山が続く山体から手前に向かって長い尾根が伸びています。その尾根が途切れる辺りから傾斜は徐々に緩やかとなり、やがて手前に向かってわずかに傾斜する、平らな野辺山高原へと続いてきます。植生や土地利用も山の傾斜に対応して、常緑針葉樹林からカラマツ林、牧草地や畑地へと変わってくるのがわかります。野辺山高原のよな地形を「火山麓扇状地」といいます。

八ヶ岳の展望を楽しみたい方は、野辺山高原の南方の山にあるスキー場とゴルフ場の間を抜けて、平沢の集落に向かう道路へと足を延ばしてみましよう。平沢時に至るまでの道路は、足下に宇宙電波観測所の電波望遠鏡群が見え、野辺山高原と八ヶ岳の全景を眺めるのに絶好の場所です。峠を越えると大門川の谷を隔てて、八ヶ岳から続くすそ野がはるかに低いところまで続き、その先には甲府盆地が広がっています。その甲府盆地の先には壁のようにそびえる三、〇〇〇mを超す赤石山脈あかいし(南アルプス)の山々が連なっています。峠から少し下った所からは富士山の姿も見えてきます。ここは明治時代の初めに日本の地質学の基礎を築いたナウマンが一八七五年に当地を訪れた際に、「フォッサマグナ」を想起した原点の場所だといわれている所です。フォッサマグナとは、日本の地質を東西に二分する境界地帯のことで、本州中部を横断しています。「諏訪湖サーピスエリアから見た八ヶ岳」の項で述べた糸静線は、その西の



縁を限る断層です。八ヶ岳も富士山も、フォッサマグナの真ん中に噴きだした火山なのです。

#### 佐久平から見た八ヶ岳

野辺山駅から再び小海線の旅を続けましょう。野辺山高原に別れを告げて、列車は一気に二〇〇メートルも下り、千曲川源流の村、川上村の信濃川上駅（一、二、三五）に着きます。ここからは列車は千曲川に沿って、八ヶ岳と奥秩父の山に挟まれた谷間を走ります。そのため八ヶ岳の勇姿は、千曲川に注ぐ川の谷間からわずかにうかがわれるだけとなります。

松原湖駅（まつはらこ）までの千曲川沿いに見られる崖は、中生代や古生代の砂岩や頁岩からできています。これらの地層は関東山地に続くもので、千曲川の右岸側は急傾斜の山となっています。これに対して松原湖駅から北では、八ヶ岳火山に由来する火山泥流（でいりやう）や火砕流（かさいりやう）堆積物、あるいはかつて山麓にあった湖に堆積した地層などの崖が見られます。そしてその崖の上は段丘面や火山山麓の緩やかな斜面となっていて、平らになっています。この地域の八ヶ岳山麓から山体にかけては、松原湖や八千穂（やちほ）高原の別荘地・スキー場といった観光リゾート地、稲子（いなご）の湯温泉や白駒池（しろこまいけ）などがあり、四季を通じて観光客や登山客でにぎわっています。

沿線の風景は標高約七七〇メートルの佐久町の海瀬駅（かいせ）あたりから開け、水田やりんご畑が広がる佐久盆地へと入ります。ここからは広くすそ野を引く北八ヶ岳の雄大な眺めが望めるようになります。山頂部には南八ヶ岳とは違って、溶岩流によってできた丸く穏やかな山が並んでいます。向かって右端に見えるの

が蓼科山、その左に横岳、竊枯山、丸山などが続き、三角形に尖った天狗岳がわずかに見えます。小海線をさらに中込、新幹線佐久平駅、小諸駅へと向っていくと、一続きに見えたその山麓緩斜面も山体から放射状に長くのびた谷に深く刻まれて、山麓部の浸食がだいぶ進んでいることがわかります。

なお小海線からはやや離れますが、北八ヶ岳山麓の八千穂村から立科町にかけての国道11号、142号沿いに車を走らせてみると、山麓緩斜面を谷が深く削り込んだ崖には砂や泥、礫などからできたほぼ水平の地層が観察されます。これらの地層は「八千穂層群」と呼ばれているもので、中に挟まれている火山灰や凝灰角礫岩などの火山噴出物が、八ヶ岳の山体に向かって厚くなっているのがわかります。

このように地形的にみても、北八ヶ岳は非常に古い時期に広大な山麓緩斜面をつくった大きな火山活動があったこと、しかもその山麓には大きな湖が広がっていたこと、その古い火山は崩壊と浸食によってなくなってしまうこと、そして、浸食された火山体の上部には一番新しい時期の溶岩流と溶岩円頂丘がのっていることがわかります。

#### ◆コラム 汽車を止めるヤステ

八ヶ岳東麓では五、六年に一度、幅六、長さ三五ほどのヤステが大発生します。この大発生したヤステの体液や脂分で、小海線を走る汽車の車輪が空回りしてしまつて急勾配の線路を上ることができなくなることがあります。そのため「キシヤステ」の名前がついています。分類上はオビバヤステの仲間とされています。普段は落ち葉や石の下などの湿った暗い所に生息しています



キシヤヤステ (提供 興水太  
仲氏)

が、雨の多い時期になるとよく姿を現します。身を丸め、横になった姿が「銭」を連想させるため、ゼニムシとも呼ばれています。

キシヤヤステはカラマツ林に生息し、カラマツの落ち葉を食べるとされています。八千穂村での調査によると一平方メートル一〇〇〜二〇〇匹の密度で生息していますが、林の条件によってはその五倍以上に達するといわれています。そして、高密度となった時に集団で移動分散を始めるため、大発生したようにみえるのです。成体になるまでの期間が五、六年なので、この現象も周期的に起きています。

大発生した時のたくさんのヤステを見ると気味が悪いですが、彼らもカラマツの大量の落ち葉を土壌に変える分解者として八ヶ岳の豊かな自然を支える重要なメンバーなのです。

## 2 八ヶ岳連峰の山々

これまで山麓から眺めてきたように、八ヶ岳は南北二一<sup>〇</sup>にわたってたくさんの峰が連なっており、「八ヶ岳連峰」と呼ばれています。「八ヶ岳」とは、特定の八つの山を指すのではなく、「たくさんの山」といった意味のようです。既に多くの山を紹介しましたが、ここでは全山完全縦走をしたつもりで、す

べての山を簡単に紹介しましょう。実際には四日から五日のコースですが、駆け足で巡ってみます。

## (1) 南八ヶ岳

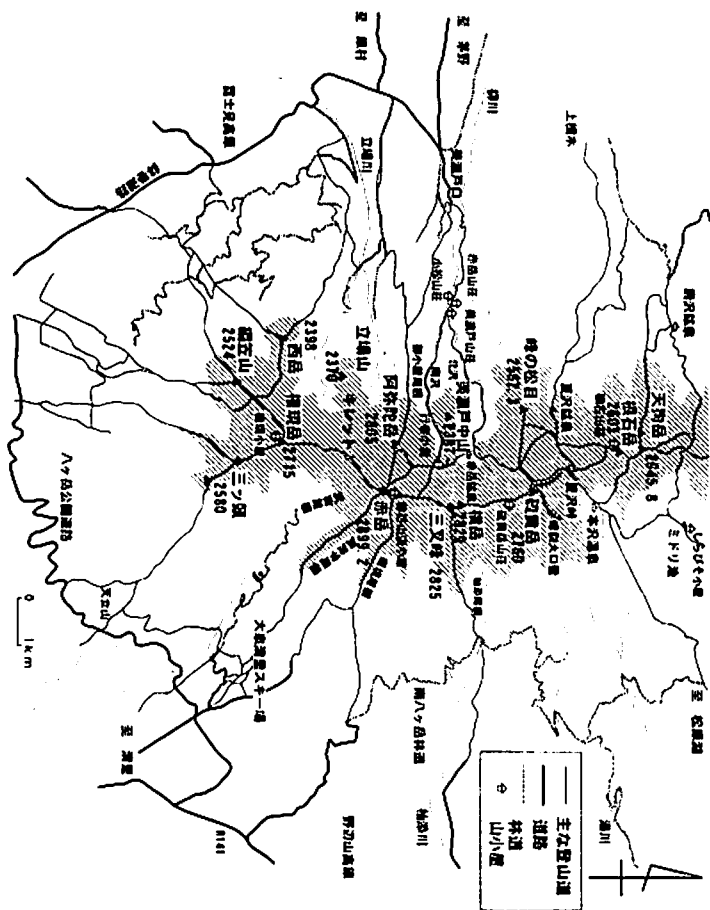
### 編笠山 (二、五二四にじ)

小淵沢駅から長い山麓の道をたどって、登山道に取り付く所が観音平くわんのんだいらです。尾根道を登ると、八ヶ岳連峰最南端の山、編笠山にたどり着きます。編笠を伏せたような形からこの名前が付きました。山頂は大きな岩がごろごろしていて、その間にハイマツが生えています。山そのものは単調で物足りない感じもしますが、山頂からの眺めはすばらしく、南アルプスの連山が間近に迫って見えるのは圧巻です。南の方には富士山も美しい姿を見せています。

### 西岳 (二、三九八にしだけ)

編笠山と権現岳の間の鞍部あんどにある青年小屋から、西に向かう源治新道げんじしんどうをたどると西岳に至ります。麓の富士見高原から見ると、編笠山と並んで円錐形の整った形に見える山です。登山という点ではやや存在感の薄い山ですが、西岳のカラマツ谷には、八ヶ岳だけに見られる貴重な植物のヤツガタケトウヒをはじめ珍しい針葉樹が生育しており、学術参考保護林となっています。

図1 八ヶ岳南部の山々



権現岳（二、七一五〇）

権現岳は著しく浸食が進んで、山容は非常に険しくなっています。その険しさの故に、修験道の道場となっていました。古地図には小さな峰に対して薬師、阿弥陀、虚空蔵などの名前が見られ、また滝や岩穴などにも行を行ったことをうかがわせる名前の付いたものが多くみられます。山頂には権現社が祭られています。横岳、赤岳、阿弥陀岳のグループとは別の、独立した修験道場をつくっていたようです。権現岳は鎖場などもあって地形的には険しいのですが、山頂直下まで植生に覆われているために、赤岳などよりはいくぶん穏やかな印象を与えます。山頂から南東に延びる尾根の先には三ツ頭（二、五八〇）があります。

赤岳（二、八九九・二〇〇）

赤岳は長野、山梨県境にあり、八ヶ岳の主峰です。周囲に数百メートルの断崖を造ってそびえ立っており、八ヶ岳連峰の盟主にふさわしい山容です。山名はこの山の岩肌が赤い色をしているからとも、「赤」という色や音が神性を有するため、主峰にふさわしく名付けられたともいわれています。山頂の南峰には赤岳神社が祭られ、赤岳講の山岳信仰の山でした。足下の谷底に見える行者小屋は、その名の通りかつて行者達の道場となっていたところで、白装束に身を固めた人たちが列をなして山頂を目指していた往時の様子がしのべれます。行者小屋の背後に見えるこんもりとした山は英濃戸中山（二、三八七）で、溶岩円頂丘です。赤岳の山頂は視界を遮るものが何もなく、三六〇度の眺望が楽しめます。毎年登山シ

ーズンの開幕に先立って、八ヶ岳の開山祭はこの赤岳の山頂で行われます。

### 阿弥陀岳（二、八〇五）

赤岳から縦走路をはずれて西に延びる尾根をたどると、小さな中岳を経て、独立峰の阿弥陀岳に至ります。山の形が赤岳に似ており、山麓の見る位置によつては主峰のように見えることがあります。山の名前からわかるように、この山も山岳信仰の山でした。山頂には二十数基の石仏や石碑が祭られています。阿弥陀岳から西に延びる御小屋尾根の先端には御小屋山（二、一三七）があり、諏訪神社の御柱を切り出す山となっています。また南に続く南稜の立場山（二、三七〇）一带はかつて鹿の狼が盛んに行われた所です。「たつば」とは勢子が追い込んできた獲物を射手が待ちかまえている所だそうです。このように阿弥陀岳は古くから人びとの信仰や生活と密接に関係した山でした。この山は縦走路からはずれているために、横岳、赤岳、権現岳といった南八ヶ岳の主な山々をバノラマのように見渡すことができます。

### 横岳（二、八二九）

横岳はいくつもの峰が横に並んで、険しい岩稜が続く山です。佐久側は比較的緩やかで、山頂付近まで植生に覆われていますが、諏訪側はすっぽりと切れ込んで険しい岩壁になっています。その山の険しさの故に、南八ヶ岳のほかの山と同様、修験道の山岳信仰の場となりました。麓の赤岳鉱泉から眺めると仏像の形に見える岩峰が「大同心」「小同心」と呼ばれていたり、頂上の岩峰に「奥の院」「石尊峰」

「鉾峰」などの名前が付けられているのは、その名残でしょう。険しい岩壁は、岩登りをするクライマーたちの格好の登はんルートとなっています。また山頂部は八ヶ岳でも有数のお花畑が広がる所で、初夏には可憐な高山植物の花が咲き乱れます。硫黄岳に至る尾根筋には、コマクサの大群落があります。険しい岩壁と可憐な花が好対照をなす、不思議な魅力を持った山です。

### 硫黄岳 (二、七六〇m)

北側半分が馬蹄形に深くえぐり取られた、爆裂火口のある山です。本沢温泉の方から吹き上げてくる風は、わずかに硫黄臭を含んでいます。頂上から眺めると南八ヶ岳の山々が眼前に迫ってきます。西に延びる尾根をたどると、赤岩の頭というピークを経て、峰の松目(二、五六七m)に至ります。これは溶岩円頂丘の一つです。

## (2) 北八ヶ岳

### 箕冠山 (三、五九〇m)、根石岳 (二、六〇三m)

硫黄岳から下ってきた所が夏沢峠です。八ヶ岳はここを境として、北八ヶ岳と南八ヶ岳に分けられています。箕冠山と根石岳は、夏沢峠から天狗岳に至る間にある小さな山です。箕冠山の南斜面は樹林に覆われた緩やかな溶岩の斜面ですが、北側と西側は切り立った崖が続いています。根石岳付近はコマクサなどの高山植物の多い所です。



天狗岳 (二、六四六〇)

北八ヶ岳の中では三角に尖った形をしている山なので、この名前が付いたのかもしれませんが。東西二つのピークからなり、東天狗、西天狗と呼ばれています。東天狗は赤い岩が露出して尖っているので、赤天狗とも呼ばれています。これに対して西天狗は頂上までハイマツに覆われているので、背天狗とも呼ばれています。東天狗岳の北斜面は溶岩が流れ下ったままの姿がよく残っており、その窪みにはスリバチ池があつて、高山植物が岩の間を埋めています。しかし東側は崩壊斜面となっており、垂直に近い岩壁が続いています。北東の方には山がずり落ちたように見える稲子岳 (二、三八〇〇) が見えます。

中山 (二、四九二〇)、丸山 (二、三三〇〇)

中山は山頂まで樹林に覆われたなだらかな山です。あまり眺望のきかない山ですが、頂上近くの展望台からは、天狗岳や南八ヶ岳の山々が見渡せます。丸山との鞍部に高見石小屋があり、山小屋の背後には巨大な溶岩の塊が累々と重なった高見石があります。そこからは足下に白駒池が見え、また北八ヶ岳の山々がよく見渡せる、実に眺めのいい所です。丸山はその名の示す通り、整った円錐形をしています。山頂まで針葉樹林におおわれていて、展望はききませんが、北八ヶ岳の雰囲気満喫できる山です。頂上から西に延びる尾根の先端に、冷山 (二、一九八〇) があります。この山は黒曜石の産地として知られ、旧石器時代から縄文時代にかけて石器の原石として盛んに利用されました。丸山の北峰を下ると、



八ヶ岳を横断する国道29号の麦草峠に出ます。

#### 茶臼山 (二、三八四m)

山の形が円錐形をしていて、茶臼を伏せたように見えるので、この名前が付いたものと思われる。山頂の標識のある所は樹林帯の中で全く眺望はききませんが、そこから少し西にはずれた所は強い西風を受けて露岩地帯となっており、蓼科方面を眺望するのに絶好の場所となっています。縞枯山の縞枯れ現象を見るのも、ここが最適地です。

#### 縞枯山 (二、四〇三m)

この山の南斜面に、針葉樹林が集団で立ち枯れして、遠くから見ると縞状に見える「縞枯れ現象」がみられます。山の名前はここから付けられたものです。茶臼山からの登山道は、この縞枯帯を横切るのですが、その構造を観察することができます。山頂はなだらかな尾根のようになっていますが、南の肩の部分が露岩地帯となっていて、麦草峠から南八ヶ岳方面がよく眺められます。

#### 横岳 (二、四八〇m)

雨池峠を経て小さなピークの雨池山(二、三三五m)を越えると、急な登りになります。そこを登り切ると、三つの岩峰からなる三ツ岳に着きます。これは横岳から延びる溶岩台地のような尾根の先端にある

峰です。ここから北横岳ヒュッテを通過して約一時間で横岳に着きます。北八ヶ岳の横岳という意味で、北横岳ともいわれます。山頂まで針葉樹林に覆われた山ですが、頂上には深いすり鉢型の爆裂火口の跡が見られます。横岳北峰から尾根道をたどると大岳(二、三八二〇)に着きます。三ツ岳と同様に溶岩台地のような尾根の先端にあるピークです。足下に双子池の雄池と雌池が並んでいるのが見えます。急坂を降りると双子池に着き、その北側にある双子山(二、二二四〇)を越えると、大河原峠です。

#### 蓼科山(二、五三〇二)

大河原峠から前掛山(二、三五四〇)を経て稜線沿いに進むと、蓼科山の肩に当たる將軍平に着きます。ここから岩がごろごろする急坂を三〇分ほど登ると、蓼科山山頂に着きます。八ヶ岳連峰北端の独立峰で、円錐形の整った形から、別名「諏訪富士」ともいわれています。頂上は森林限界を超えており、周りに視界を遮るものがなく、三六〇度の眺望が楽しめる山です。

#### ◆コラム 八ヶ岳登山の歴史

八ヶ岳に最初に登ったのは、平安から中世の修験者たちだったと思われれます。平安時代から盛んになった山岳信仰は、全国各地に霊峰を生みました。北八ヶ岳の蓼科山が平安時代の中ごろ、八七八年(元慶二年)に宮廷から従五位下の位を授かった記録が残っています。また、赤岳を中心に一大霊場として栄えました。現在でも諏訪地方を中心に「赤岳講」という信者組織が残っています。諏